

諷刺と語りの揺らぎ

——『ガリヴァー旅行記』再読——

原田範行

1. 言語の多義性と諷刺

1660年に創設された王立協会（The Royal Society）は、当初、英語の改良を活動内容の一つに含んでいた（勅許は1662年）。創設メンバーの一人で、オクスフォード大学ワダム・コレッジのフェローおよびリンカン大聖堂の名誉参事会員であったトマス・スプラット（Thomas Sprat）は、当時の協会における英語改良の理念を次のように説明している。

They have therefore been most rigorous in putting in execution, the only Remedy, that can be found for this *extravagance*... and that has been, a constant Resolution, to reject all the amplifications, digressions, and swellings of style: to return back to the primitive purity, and shortness, when men deliver'd so many *things*, almost in an equal number of *words*. They have exacted from all their members a close naked, natural way of speaking; positive expressions; clear senses; a native easiness: bringing all things as near the Mathematical plainness, as they can: and preferring the language of Artizans, Countrymen, and Merchants, before that, of Wits, or Scholars. (Sprat 113)

冗長にして散漫、少なからず脱線も多い当時の散文を、「伝えるべき事柄とほぼ同数の語」で記されるような、「できるだけ数学的平明さ」に近い、「自然な口語体」にしたいとする英語改良の趣旨は、近代市民社会が成立しつつあった当時あって、散文で書かれた文書が社会の枢要を担う重要なコミュニケー

ションであったこと、また自然科学の発達に伴って人々の世界観や宇宙観に関わる新たな発見を正確かつ平易に説明することが求められたこと、などを勘案すれば、きわめて分かりやすい。日本でも明治維新前後に、いわゆる「言文一致」をめざして書き言葉の改良が進んだことを考えれば、こうした言語改良運動は、近代社会の形成に不可欠な要素の一つと見ることもできよう（Harada, “Aspects morphologiques du livre et du langage” 47-50）。

だが、一つ一つの単語であれ、文であれ、言葉が、こうした「数学的平明さ」の追求を許容しつつも、それを軽々と欺いてしまうような多義性を有していることは、言葉をめぐる私たちの日常的な経験からも明らかである。後述するが、リリパットに漂着したガリヴァーは、この小人国の皇帝に謁見し、その様子を「他の宮廷人よりも私の爪の幅ほど背が高い」と記している。それくらい背が高かったので、「見る者に畏怖の念を起こさせる」というわけだが、この「爪の幅ほど背が高い」という描写は、それが特に巨人としてのガリヴァーによってなされていることを考えれば、単に身長の違いのみを「数学的平明さ」をもって表現したものばかりは考えにくいであろう。「たかが爪の幅くらいのことだ」という含意を読者は容易に察知できるからである。こうした軽侮の念が、どれほど、この「爪の幅ほど背が高い」には含まれているのか、いないのか——それを読み取っていくのが、コミュニケーション理解の要諦であり、また文学作品の解釈にあたっての重要な点の一つと言えよう。いずれにしても言語は、ある面で、「伝えるべき事柄とほぼ同数の語」といった一義性や「数学的平明さ」を志向しつつ、しかし同時に、その一義性には決して収斂しない多義性を有し、しかもその多義性によって表現の豊かさが保証されていると言えよう。

こうした言語の多義性を念頭に、もう一例、『ガリヴァー旅行記』刊行当時の文章を検討してみることにはしたい。1739年に小冊子の形で刊行されたサミュエル・ジョンソン（Samuel Johnson）の「演劇検閲官の完璧なる弁護」（“A Complete Vindication of the Licensors of the Stage”）の一節である。1737年に演劇に関する事前検閲法が施行され、演劇を上演するためには二週間ほど前までに、台本を当局（文中では宮内大臣（Lord Chamberlain））に提出して許可を得

なければならなくなった。これを嫌って、ヘンリー・フィールディング (Henry Fielding) が劇作の筆を折り、小説に転じたことはよく知られている。ジョンソンは、この検閲官に対して「完璧なる弁護」を展開する。

Unhappy would it be for men in power, were they always obliged to publish the motives of their conduct. What is power but the liberty of acting without being accountable? The advocates for the licensing act have alleged that the Lord Chamberlain has always had authority to prohibit the representation of a play for just reasons. Why then did we call in all our force to procure an Act of Parliament? Was it to enable him to do what he has always done, to confirm an authority which no man attempted to impair, or pretended to dispute? No, certainly: our intention was to invest him with new privileges, and to empower him to do that *without reason*, which *with reason* he could do before.

We have found by long experience that to lie under a necessity of assigning reasons is very troublesome, and that many an excellent design has miscarried by the loss of time spent unnecessarily in examining reasons.

Always to call for reasons, and always to reject them, shows a strange degree of perverseness; yet such is the daily behavior of our adversaries, who have never yet been satisfied with any reasons that have been offered by us. (Johnson 75-76)

いったい、この「完璧なる弁護」は、演劇検閲官を本当に弁護しているのだろうか？ もちろん答えは、否、である。しかしながら、確かにこの文章は、少なくともその表層的な意味に関する限り、完璧なまでに検閲官の職権を弁護する文章になっていて、その限りにおいて、例えば政府の検閲などを巧みにすり抜ける知恵を存分に働かせている。

この文章が、なぜ「完璧なる弁護」ではなく、むしろ完璧なる否定になっているのかと言え、それは、もちろんジョンソンの思想信条にかかわる伝記的な事実からも明白ではあるのだが、なによりもこの文章が、社会の約束事を支えるはずの“reason” (道理, 理由, 理性) を徹底的に否定することで検閲官の職権を支持するという体裁を取っており、その不当性が、文章の表層の意味

にもかかわらずあまりにも明らかであるからだ。一般に、このような表現手法を諷刺と言う。すなわち諷刺とは、第一に、語り手が本来語ろうとする意図とは表面上異なる、それどころか、しばしば相反するような主張を言葉の表面的な意味において進めることで、その表層性を読者に気づかせ、表面的な意味の軽薄さと矛盾を嗤う表現手法と言うことができよう。言語の一義性は、まずここにおいて、打ち碎かれることになる。

しかしながら、私たちが諷刺を考える際にもう一つ、注意しておかなければならないことがある。それは、上記の引用に即して言えば、ジョンソンは、小冊子のタイトルとは全く逆の、すなわち、演劇検閲官の専横を完璧に否定することのみを意図してこの文章を記したのかどうか、ということである。作者が、言葉の表面的な意味とは逆のことを意図してある表現をしていると考えるならば、確かにそれは、言語の一義性を打ち碎くことにはなるのだが、しかし、表面的な意味とは逆のこのことを措定しているとすれば、そこではやはり言葉が再び一義的に使われているということになってしまうのではあるまいか。Aに対して反Aというだけならば、結局は、意味を置き換えているだけのことであって、言語の一義性そのものへの重要な否定にはならないのではあるまいか。

こうした視点からもう一度、上記の文章を読み直すとき、私たちは、「理性の時代」の権化であるかのように扱われることの多いジョンソンが、実は、“reason”を越えた超越的な思索に思いを寄せることもあったという伝記的事情に逢着する。引用文中の特に第二、第三段落を記すジョンソンが、決して、「理屈ばかりをこねて時間を費消し、すばらしい計画を潰してしまう」安易な“reason”偏重主義者でないことは、例えば彼が、理屈よりも常識を重んじていたことや、1749年に刊行した『人間の願望のむなしさ』(*The Vanity of Human Wishes*)のような作品に見られる超越的な視点を有していたことなどを考慮すれば、これもまた明らかなのである(Harada, “Regeneration from Vanity” 273-75)。もちろんだからと言って、ジョンソンが演劇検閲官の行為を支持していたというわけではない。そうではなく、演劇検閲官の専横を強烈に批判しながら、しかし同時に、そうした検閲制度の成立を許してしまうような、「理屈ば

かりをこねて時間を費消」する社会に、あるいは人生に、大きな疑問を投げかけてもいる、ということなのである。つまり、たんに、Aか反Aか、という画一的な図式には収まらず、Aと反Aをいわば振り子の両極としながらも、その間に無限に広がる多様な世界に表現者の思いの核心は存在していて、そういう多様性を、諷刺という表現手法は見事に映し出す、と考えられるのである。言語の一義性を突き崩す強力な力を諷刺が有しているのは、こうした第二の性格をも内包しているからである。

一義的理解や一元的解釈を斥けるこのような諷刺の特色は、ある意味で、言語が本来有する一般的な特徴としての多義性を反映したものとも言える。諷刺と呼ばれる文学作品は、それをきわめて明確な形で提示しているだけのこと、と言ってもよいかも知れない。小説という言語表現の一領域が生まれつつあったまさにその最中に、『ガリヴァー旅行記』のような傑出した諷刺が生まれたのは、それゆえ、ごく自然な成り行きであったとも言えよう。児童文学や映像作品としても世界中で親しまれているこの名作を、諷刺という観点から改めて読み直してみるという試みは、小説の誕生とその特質、さらには言語表現の本質をも改めて検証し、21世紀の言語文化のゆくえを考えて行こうとする営みにほかならない。

2. 『ガリヴァー旅行記』の諷刺の特徴 (1) —諷刺のおもしろさ

ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift) の『ガリヴァー旅行記』(初版の正式なタイトルは *Travels into Several Remote Nations of the World, in Four Parts. By Lemuel Gulliver, First a Surgeon, and then a Captain of Several Ships* だが、初版刊行当時から、*Gulliver's Travels* の略称で親しまれていた) は、1726年10月28日、ロンドンの書肆ベンジャミン・モットから刊行された。八折本2巻で8シリング6ペンス。決して安価なものとは言えないが、それでも初版初刷りは瞬く間に売り切れ、同年中に二度の増刷が行われている。このほか、いわゆるダブリン版初版も同時期に刊行されていることを考えれば、刊行当初からこの作品が多くの読者に親しまれていたことが分かる。ちなみにこのモットから刊行された初版

には、スウィフトの意に反した削除ないしは修正が加えられているため、それを概ね復元し、1735年に全4巻のスウィフト著作集の第3巻として刊行されたもの（出版者はダブリンのジョージ・フォークナー）が、今日、定本とされることが多い。

『ガリヴァー旅行記』は、四つの篇から成り立っている。ガリヴァーが小人国リリパットを旅するのが第1篇、大人国プロブディンナグを旅するのが第2篇、太平洋上に浮かぶラピュータやその下のバルニバービ、ラグナグ、グラブダブドリブ、日本などをめぐる第3篇、そして馬とヤフーが暮らすフウイヌムの冒険が第4篇である。18世紀当時から今日に至るまで、各種抄録版や映像作品などでは、第1篇のみ、もしくは第1篇と第2篇が利用されることが多いが、これは、第1篇と第2篇の舞台が、小人と巨人というきわめて分かりやすい視覚的対比をもとに設定されていること、第3篇が太平洋上の島々をめぐる形なのでやや統一感に欠けること、第4篇にはあくまでもフウイヌムにとどまろうとするガリヴァーの人間嫌いや絶望が色濃くうかがえることなどによるものと言えよう。もっとも、この作品を貫く強烈な諷刺の特徴は、第1篇の初めからはっきりとうかがうことができる。ここでは一つだけ事例を紹介し、この作品が持つ諷刺の醍醐味をまずは存分に味わってみることにしたい。

1699年5月、船長ウィリアム・プリチャード率いるアンテロープ号に乗り込んだガリヴァーは、しかし暴風雨に遭い、ファン・ディーメンズ・ランド（タスマニア）の北西海域にまで流され、ついには船が真二つに壊れてただ一人、リリパット国の浜辺に漂着する。気絶していたガリヴァーが目を覚ますとあたりには大勢の小人がいて、彼は砂浜に紐で縛りつけられている——言うまでもなく、『ガリヴァー旅行記』の有名な冒頭の場面である。やがてガリヴァーは、リリパットの馬1,500頭に引かれて、この国の首都へ向かい、そこで皇帝陛下に謁見することになる。以下の引用は、白馬に乗って現れたリリパットの皇帝の様子をガリヴァーが記したものである。

He is taller by almost the Breadth of my Nail, than any of his Court; which alone is enough to strike an Awe into the Beholders. His Features are strong and masculine,

with an *Austrian* Lip, and arched Nose, his Complexion olive, his Countenance erect, his Body and Limbs well proportioned, all his Motions graceful, and his Deportment majestic. He was then past his Prime, being twenty-eight Years and three Quarters old, of which he had reigned about seven, in great Felicity, and generally victorious. (Swift 25)

“strong”, “masculine”, “erect”, “well proportioned”, “graceful”, “majestic”, “Felicity”, “victorious” などといった名詞、形容詞が並んで、小人ながらいかにも一国を率いる皇帝らしい描写が展開されている。その限りにおいて、この描写に違和感はない。かつて夏目漱石が『文学評論』（1909）において、こうした『ガリヴァー旅行記』の描写の特質を、「荒唐架空の世界を描いてあたかも現実界にある如き思いを起こさしめる」と評しているが（夏目121）、まさにひとたび小人の国であることを読者が了解すれば、そこにはいかにも人間の「現実界」のような世界が描かれるというわけである。

だが、その精巧な描写をよく読んでみると、実は幾つかの不可解な記述が忍びこんでいることに気づく。皇帝の容貌が力強くて男らしい、というのはともかく、“an *Austrian* Lip” とあるのはなぜか？ 鼻もわざわざ “arched Nose” と記されている。おまけにこの皇帝は、28歳9か月ながら若い盛りを過ぎており、既にこの国を治めて7年あまり、ということになっている。先に挙げた、一般に皇帝らしいという印象を与える描写の中に紛れ込んだ、この具体的かつ不可解な説明には、明らかに作者の意図が感じられる。

この謎は、今日までの考証的研究によって、ある程度までは明らかにすることができる。例えば “an *Austrian* Lip” は、当時、オーストリア帝国（神聖ローマ帝国）皇帝を輩出してきたハプスブルク家の当主たちの遺伝的な形質と考えられるもので、下唇からあごが前に突き出た顔立ちを示すものであり、また、“arched Nose” は、まさにアーチ形の鼻であった国王ウィリアム3世（William III）へのある種の嘲笑を含んだ呼称であったことが判明している。この国を治めて7年あまり、というのは、スウィフトが『ガリヴァー旅行記』の執筆を開始したと推定される1721年において、ちょうど7年間、すなわち1714年か

らイギリスを治め、既に還暦を迎えて、少なくとも若い盛りを過ぎていた時の国王ジョージ1世を指すものではないか、ということも指摘されている。こうなってくると、いささか謎めいたりリパット皇帝の描写も、実は、当時のイギリスやヨーロッパ諸国の国王や皇帝の肖像が重ね合わせられていることが分かってきて、なるほどこの作品が諷刺的だ、ということにも合点が行くというわけだ。

しかしながら、“an *Austrian Lip*” がハプスブルク家出身のオーストリア帝国皇帝のことである云々、という謎解きのみでは、この文章の真意は分からない。そもそもなぜ、イギリスと厳しく対立していたオーストリア帝国皇帝と、イギリスのウィリアム3世やジョージ1世の表象が交錯しているのか。いったいこのリリパットの皇帝を、ガリヴァーは好意的に見ているのか、それとも否定的に見ているのか。ここまで来ると、先述したように、皇帝が「他の宮廷人よりも私の爪の幅ほど背が高い」という一節の意味も微妙に揺れてくる。かりに、ガリヴァーが、あるいはスウィフトが、このリリパットの皇帝を批判的に描写しているとすれば、オーストリア帝国皇帝とウィリアム1世、そしてジョージ1世の三者に共通するのは、イギリスから見た「外国人嫌い」の表象と言えるかもしれない。言うまでもなく、ウィリアム3世は名誉革命に際してオランダからやって来た、イギリス王室史の中でも最も不人気であったと言われる国王であり、またジョージ1世は、アン女王崩御の後、親戚筋としてハノーヴァーから招かれたやはり外来の国王で、英語も覚束なかったことはよく知られている。しかし、この「外国人嫌い」の表象であるという解釈は、イギリスを遠く離れてリリパットやプロブデインナグを旅するガリヴァー自身が、いわば異邦人であること、また、アングロ・アイリッシュであった作者スウィフトが、ロンドンにおいて常に異邦人としての悲哀を味わっていたことを勘案すると、いささか適切さを欠くことになる。「外国人嫌い」という考え方であれば、それは作品の冒頭から、ガリヴァーやスウィフト自身の存在を危うくさせる描写であるということになるからだ。他方、かりにオーストリア帝国皇帝以下の一連の表象を、力強いとか均整が取れているとか立ち居振る舞いが優雅である、といった他の描写と並んで好意的なものであるとすると、しかしそれも直ちに疑

間を惹起することになる。オーストリア帝国皇帝がイギリスと厳しく対立していたことは既に述べた通りだし、ウィリアム3世もジョージ1世も、作者スウィフトにとって敬愛すべき国王でなかったことは伝記的にも明らかである。そもそもこのリリパットの皇帝が、やがてはガリヴァーをリリパットから放逐することになるのだから、そういう皇帝への好意的な描写は、やはり作品の冒頭から、語り手としてのガリヴァーの権威を危うくする、と考えられるのではあるまいか。

実はこうしたことを考慮しながら上記の引用を検討すると、さらに複雑な含意が見えてくることになる。引用文の末尾にある“generally victorious”という表現がそれだ。直前の“great Felicity”の意味はきわめて明解である。国家安泰、ということだ。だが、概して戦争に勝っていた、というのはいささか奇妙である。「概して」というのは、一般には十回のうち七、八回は、という意味であって、二、三回は失敗することもあった、ということになる。それでは、あまり強い皇帝ということにならないのではあるまいか。ちなみに“generally”には、“universally”という意味もあって、17世紀後半まではその意味で使われた事例があることをOEDは示している。もしこの“generally”が、“universally”の意味であるとするならば、リリパットの皇帝は、徹頭徹尾、戦争に強く、それゆえ、支配欲も旺盛であった、という含意があることになり、それは、この第1篇の後半で隣国ブレフスキュを完全に支配下に収めようとする彼の姿勢とも重なってくるのだが、はたしてガリヴァーのこの段階での観察が、そのことをも予見するものであったのかどうか。

ここで重要なのは、リリパットの皇帝に関する上記の描写が、必ずしも一元的な解釈を要求するものではないこと、否、むしろそうした解釈の仕方を否定し、多様な解釈を可能ならしめるところにこそ、スウィフトの諷刺的記述の真骨頂がある、という点である。スウィフトの文章そのものに、文法的語学的な曖昧さはまったくない。多様な解釈が可能になるのは、語や文の一つ一つが少なくとも表面的にはきわめて明確に意味を示しているがゆえに、逆に、皇帝の人物像の全体の中であって、その一つ一つの語や文が指示対象とどれほど強く、またどれほど弱く結びついているのか、いわばその調合の具合を読者一人

一人に問いかける、という表現手法になっているからである。Aという読者とBという読者が、同じ解釈をする必要はない。いやおそらく、その調査の具合の判断は、千差万別であろう。言語が本質的に有する多義性を存分に発揮したこのような文章は、したがって、読者個々に読みの自由と責任をもたらすものでもある。諷刺のおもしろさはまさにこの点にあり、またそうした諷刺的手法によって貫かれた『ガリヴァー旅行記』が、刊行後三百年を経た今日にあってもお、政治批判の言説としても、児童文学作品としても、あるいは視覚・映像作品の素材としても多くの読者を魅了し続けていることの原因があると考えられるのである。

3. 『ガリヴァー旅行記』の諷刺の特徴 (2)―諷刺の破壊性

リリパットの皇帝の口から顎にかけての特徴が、“an *Austrian Lip*”である、という、文章そのものは明確でありながら、さまざまな含意や陰影を浮かび上がらせるという表現手法のおもしろさについては、前項で述べた通りである。しかしこのおもしろさは、たんに含意や陰影のみによるものではない。そもそも小人国の皇帝の描写に、代々のオーストリア帝国皇帝の顔つきの特徴が重ね合わせられるという、ある意味では予想外の、既成概念を突き崩すような視点が導入されている点にも、おもしろさの理由の一端がある。皇帝は、「人間風」のリリパット人の一人であり、オーストリア帝国皇帝もまた人間の一人であるから、まったく非現実的というわけではない。しかしあくまでも小人国の皇帝なのであるから、そこに現実の人間の特徴が持ち込まれるのは、予想外と言えば予想外であるし、その意味では非現実的とも言える。漱石の「荒唐架空の世界を描いてあたかも現実界にある如き思いを起こさしめる」という評言は、この意味において正しい。そういう、いわば非現実的現実感、語や文の一つ一つの表面的な意味が曖昧であれば、おそらくは構築しえないものであっただろう。語や文の一つ一つを正確に、精密に、あるいは現実的に紡いでいるからこそ、そして、それにもかかわらず、そうした表現の根底にある作者の人間観、社会観、世界観、宇宙観が、平凡にして予想可能な領域をはるかに超え、私た

ちの慣習や既成概念を次々に打ち壊す破壊的非現実性を有していたからこそ、可能になったものである。『ガリヴァー旅行記』における非現実的現実感は、そういう作者の思考と表現のメカニズムによるものであり、それは諷刺という表現ジャンルを大きく発展させるものでもあったとすることができる。

予想外の視点が導入されることで私たちの既成概念が次々に崩されていくという彼の諷刺の特徴は、第2篇以降にもさまざまな形で登場する。最も分かりやすいのは、第1篇と第2篇で対比的に描写される縮尺の問題であろう。ガリヴァーは、第2篇では大人国プロブディンナグに暮らすことになるが、その冒頭、彼を助け出してくれた農家の主人の家で、子供に乳を与える乳母の姿を目の当たりにして愕然とすることになる。

The Nipple was about half the Bigness of my Head, and the Hue both of that and the Dug so varified with Spots, Pimples and Freckles, that nothing could appear more nauseous: For I had a near Sight of her, she sitting down the more conveniently to give Suck, and I standing on the Table. This made me reflect upon the fair Skins of our *English* Ladies, who appear so beautiful to us, only because they are of our own Size, and their Defects not to be seen but through a magnifying Glass, where we find by Experiment that smoothest and whitest Skins look rough and coarse, and ill coloured.

I remembered when I was at *Lilliput*, the Complexions of those diminutive People appeared to me the fairest in the World: And taking upon this Subject with a Person of Learning there, who was an intimate Friend of mine; he said, that my Face appeared much fairer and smoother when he looked on me from the Ground, than it did upon a nearer View when I took him up in my Hand, and brought him close; which he confessed was at first a very shocking Sight. He said, he could discover great Holes in my Skin; that the Stumps of my Beard were ten Times stronger than the Bristles of a Boar; and my Complexion made up of several Colours altogether disagreeable: Although I must beg Leave to say for my self, that I am as fair as most of my Sex and Country, and very little Sunburnt by all my Travels. (Swift 82-83)

上記の描写もまた、正確にして緻密なものである。文法的語学的理解において誤解の余地はない。それにもかかわらずこの描写が異様な印象と驚きを読者に与えるのは、縮尺を変えろという、ごく簡単な操作によって、美しいはずの女性の肌がざらざらで見るに堪えないものとなり、それほど日焼けしているわけでもないガリヴァーの顔が醜悪なものに変じてしまっているからである。言うまでもなく、古今東西、美男美女の描写は枚挙に遑がないほどある。逆に醜悪な人間の描写も少なくない。だが『ガリヴァー旅行記』における男女の醜さの描写は、縮尺を変えろという単純明快な操作のみによって、美しいものを醜く変え、人間が古来有してきたはずの美的基準を瞬く間に崩壊させてしまうといった性質のものである。しかも、そういう価値観の大転換を語る作者の筆致は、きわめて明晰で淡々としていて、そこに一切の大言壮語はない。否、大言壮語ではないからこそ、読者は強い衝撃を受けることになるのである。

こうした『ガリヴァー旅行記』の諷刺の破壊性は、第3篇に入ってもとどまるところを知らぬかのように力を発揮する。太平洋上の空に浮かんでいるラピュータとその下にあるバルニバービという二つの島の設定自体が、そもそも、支配と被支配の上下関係の構図を明快に示すものと言えるだろうが、ここでは一例だけ、先に触れた王立協会の英語改良に諷刺の矛先が及んでいる様子を検討してみよう。

ラピュータの下にあるバルニバービの首都ラガードには大きな研究所があって、研究者たちが、日夜、さまざまな研究に勤しんでいる。その内容は、胡瓜から太陽光線を抽出したり、人糞から食料を還元したり、盲人の役に立つように触覚および嗅覚から色を識別する方法を探ったりといった具合で、いささか荒唐無稽ながら、しかし、そういうことが可能であれば、と夢想しないわけでもないようなものばかり。その中の一つが、すべての言葉を廃してモノに置き換えることはできないか、という研究であった。理由は簡単、言葉を話すのに身体（特に肺）を酷使することもなく、また各国語を習得する必要もないから、異なる言語を使う国どうしのコミュニケーションもはるかに容易になる、というわけである。ガリヴァーは研究者たちの声を代弁する。

The other was a Scheme for entirely abolishing all Words whatsoever: And this was urged as a great Advantage in Point of Health as well as Brevity. For, it is plain, that every Word we speak is in some Degree a Diminution of our Lungs by Corrosion; and consequently contributes to the shortening of our Lives. An Expedient was therefore offered, that since Words are only Names for *Things*, it would be more convenient for all Men to carry about them, such *Things* as were necessary to express the particular Business they are to discourse on. . . . Another great Advantage proposed by this Invention, was, that it would serve as an universal Language to be understood in all civilized Nations, whose Goods and Utensils are generally of the same Kind, or nearly resembling, so that their Uses might easily be comprehended. And thus, Embassadors would be qualified to treat with foreign Princes or Ministers of State, to whose Tongues they were utter Strangers. (Swift 172-73)

このラガードの研究所に関する描写が、本論の冒頭で触れたロンドンの王立協会を念頭に置いたものであることはほぼ間違いないであろう。その限りにおいて、リリパットやプロブディンナグといった国々が、実際のイギリスやアイルランド、あるいはヨーロッパ諸国を念頭に置いていることと差異はない。ただ、この研究所の描写に見られる諷刺がリリパットやプロブディンナグなどの場合と異なるのは、人間の既成概念や現実の政治を荒唐無稽な世界に置き換えて破壊的に描写するというスタンスではなく、むしろ、「ひょっとすると可能かもしれない」と人間が夢見ている妄想や実際に手掛けている実験そのものを描いてそれが荒唐無稽なものであることを露骨に示す、というスタンスを取っているという点である。言葉をモノに置き換えるという実験が夢想よりも幾分現実的であったという事情は、先に引用したスプラットによる王立協会の記録を読めば明らかであろう。その結果がどうなったのか。ガリヴァーは淡々と記述する。

However, many of the most Learned and Wise adhere to the new Scheme of expressing themselves by *Things*; which hath only this Inconvenience attending it;

that if a Man's Business be very great, and of various Kinds, he must be obliged in Proportion to carry a greater Bundle of *Things* upon his Back, unless he can afford one or two strong Servants to attend him. (Swift 173)

確かに言葉は、「伝えるべき事柄とほぼ同数の語」で記されるような「数学的平明さ」を一面では志向する。そうでなければ、自然科学的な内容を説明したり実録として記録したりすることは不可能である。だが、そうした一義的な意味、一元的な解釈に指示対象を収斂させようとするその刹那、言葉はその網の目を破って多義性を発揮することになる。それが言葉の豊かさであることを、文人スウィフトは読者に向かって語らずにはいられないのだ。

『ガリヴァー旅行記』に見られる諷刺は、ここに至ってその非現実的現実感というスタンスを大きく変容させることになる。そこに呈示されているのは、小人国や大人国に見られた非現実的現実感ではなく、現実の人間社会そのものに近接し、その異常さを指摘するという、いわば現実的非現実感であると言えるだろう。言語表現の指示対象を一義的に措定しようとする動向を噛みながら、人間が有するもろもろの既成概念、すなわち一元的なものを見方を破壊してきたスウィフトの諷刺は、今や、現実に進行する英語改良運動に及んで、現実の人間社会に非現実性を見出すことになる。非現実を現実とするのか、それとも現実を非現実とするか——多義性を駆使する諷刺表現に見られるこうした揺れを抱きつつ、ガリヴァーは第4篇で馬の社会フウイヌムを描写することになる。

4. 『ガリヴァー旅行記』の諷刺の特徴 (3) —多義性の果てに

言葉の一義性を噛み、その多義的な意味の拡がりを生かしながら「荒唐架空な」非現実を現実たらしめてきたガリヴァーだが、馬の社会フウイヌムにおいて彼は一つの難題に逢着する。それは、フウイヌムの言語が語彙に乏しく、いわば欠損を抱えた言語だったからであり、しかもその欠損こそがガリヴァーにしてみれば、むしろ理想的に思ってしまうものだったからである。実際フウイヌムの言語には、「権力」もなければ「政府」もない。「戦争」も「法律」も「罰」

もない。それらの語彙がなければ不便かという、不便を感じたのはガリヴァーであって、馬の主人の方は逆に、そういう語彙を持たなければならない、すなわち、「権力」やら「政府」を作って「戦争」をしでかし、良識を持たぬ構成員のために「法律」を作って「罰」を与えなければならない、そういう人間社会を、フウイヌムに隷属する醜悪なヤフーの社会になぞらえることになる。言葉の多義性を駆使して豊かな表現世界を歩んできたガリヴァーは、そしてスウィフトは、ここにおいてその豊かな表現世界の存立基盤そのものに重大な問題がひそんでいることに否応なく気づかされることになるのである。一義性にせよ、多義性にせよ、そういう言葉の性質をすべて包み込んだ人間のコミュニケーションのあり方に真っ向から対立するような語彙の欠損を通じて、言葉を使う人間そのものの欠陥を突きつけられるのだ。

もっとも、こうした言葉を越えた人間の行為に、作者スウィフトがこれまでまったく無関心であったかという、そういうわけではない。それを象徴的に示すのが、この作品のかなり早い段階から頻繁に登場する、いわゆるスカトロロジーの描写である。身体内に存在する邪悪なるものを排泄することによって、人間はある種の快楽を味わう。だがその快楽は、婉曲的な言い方以外の表現方法を忌避し、それゆえ、この快楽表現は明確さ、緻密さを欠くことになる。そういう事象をスウィフトがたびたび扱っているのは、実は彼が作品の冒頭から、フウイヌムでガリヴァーに突きつけられる根本的な人間の、そして言語の欠陥を予見していたためであったのかも知れない。

話を少し整理しよう。王立協会が提唱したような言葉の一義性を疑うスウィフトは、言葉の多義性を存分に生かしきること、この『ガリヴァー旅行記』を執筆した。リリパットの皇帝の人物描写に見られるように、それは、現実の国王に対する一義的なメッセージの表明ではなく、さまざまな国王や皇帝と作者が取り結んだ複雑にして多面的なメッセージを効果的に伝えるものであり、またプロブディンナグでガリヴァーが驚愕した乳母の肌に関する描写に見られるように、一元的な既成概念にとらわれた人間の行動や価値基準を破壊する自在な視点を言語表現に持ち込むことを可能にするものでもあった。そういう豊かなスウィフトの諷刺表現の世界は、かつて漱石が指摘したように、非現実的

想像世界を現実的に描くという性質を有していたが、それだけではなく、ラガードの研究所の研究者の描写に見られるように、現実を幾分デフォルメしてその異常さを露悪的に描くという場合もあった。前者は、いわばからめ手から言葉の一義的な意味や指示対象を突き崩して行くのに対して、後者は、まさに言葉をモノに置き換えようとする研究者に象徴されるように、現在進行中の事象を正面から扱い、それに一定のデフォルメを加えることで、その事象の背後に隠された多様な可能性を強引に引きずり出すという形の破壊性を有していたと言えるだろう。

ところが、言葉の多義性を駆使して現実の多様性の中にある意味の揺らぎを謳歌してきたスウィフトの筆は、そういう揺らぎそのものを無に帰してしまうような語彙の欠落を前に、しばし頓挫せざるを得ない。ここに至ってスウィフトは、馬の主人を前に自らを語るガリヴァーの言葉をいわば空回りさせることになる。

The Reader may be disposed to wonder how I could prevail on my self to give so free a Representation of my own Species, among a Race of Mortals who were already too apt to conceive the vilest Opinion of Human Kind, from that entire Congruity betwixt me and their *Yaboos*. But I must freely confess, that the many Virtues of those excellent *Quadrupeds* placed in opposite View to human Corruptions, had so far opened my Eyes, and enlarged my Understanding, that I began to view the Actions and Passions of Man in a very different Light; and to think the Honour of my own Kind not worth managing; which, besides, it was impossible for me to do before a Person of so acute a Judgment as my Master, who daily convinced me of a thousand Faults in my self, whereof I had not the least Perception before, and which with us would never be numbered even among human Infirmities. I had likewise learned from his Example an utter Detestation of all Falsehood or Disguise; and *Truth* appeared so amiable to me, that I determined upon sacrificing every thing to it. (Swift 240)

自分はなぜ、かくも人間に否定的な馬の主人の前で醜悪なヤファーに比せられる

人間社会のことをべらべらと語ったのか——それを説明するガリヴァーの口調は、あたかも排泄欲求を満たしつつある人間でもあるかのように、快樂の中に意識が混濁し、すべてを明け渡すかのような調子である。わずか数行前に“*Quadrupeds*”と言っておきながら、それが“a Person of so acute a Judgment as my Master”と変じているのもその表れであろう。そして彼のこの饒舌は、決して実を結ぶことはない。そういう饒舌には、「権力」も「政府」も「戦争」も「法律」も「罰」もあるからであり、それは醜悪なヤフーの社会と同じだからである。

人間と動物の一般的な関係を転倒させた非現実を描きながら、人間の現実を突きつけられることになったガリヴァーは、フウイヌムの社会に永住することを切望しつつもそれを拒絶され、傷心の身でイギリスへ帰国することになる。家族の元へ戻ってもフウイヌムへの憧憬は強く、一年間は妻や子供たちの人間的なおいにすら耐えられない。帰国後、五年が経過した今、彼はなんとか人間社会での生活に少し慣れ、それでこの作品の筆を執っているという設定だが、しかしその結末には、人間をヤフーになぞらえた陰惨な文言が記されることになる。

But the *Honyhnhnms*, who live under the Government of Reason, are no more proud of the good Qualities they possess, than I should be for not wanting a Leg or an Arm, which no Man in his Wits would boast of, although he must be miserable without them. I dwell the longer upon this Subject from the Desire I have to make the Society of an *English Yahoo* by any Means not insupportable; and therefore I here intreat those who have any Tincture of this absurd Vice, that they will not presume to appear in my Sight. (Swift 277)

ヤフーのような性質を持った人間は自分の目の前に姿を見せなくてくれ、という人間に対する呪詛に満ちたこの結末は、結局のところ、言語表現を多義的に捉え、人間の想像力と社会の多様性をさまざまな角度から観察した結果もたらされたものである。それは諷刺という表現手法がたどり着く、究極的な結論の

一つであったとも言えよう。その意味において諷刺は、人間の、平凡ではあるが日常的で健全とも言えるような視点を狂わせ、通常は看過してしまうような罪業の深みに読者を追い落とすものでもある。現代の優れたスウィフト学者の一人であるヘルマン・J・リアルは、こうしたスウィフト文学の特徴をとらえて、「スウィフトは、読者を安穩とした気分させておくことは決してしない。だからこそ彼は、これまでも、そしてたぶんこれからも、忘れ去られることはあるまい」と述べている（Real 4；拙訳による引用）。確かにそれが諷刺の特質であり、『ガリヴァー旅行記』はその可能性の極北を示すものと言ってよいであろう。

しかしながら、「読者を安穩とした気分させておくことは決してしない」こうした諷刺表現が、人間呪詛とともに、人間の限りない想像力の拡がり豊かなに示していることも忘れるべきではあるまい。児童文学としても、視覚・映像作品の素材としても、この作品が三百年にわたって長く親しまれてきたことは、そのことの証左である。『ガリヴァー旅行記』が読まれなくなるとすれば、それは人間が、自らの欠陥や罪業を知ることを恐れるあまり、その深みにまで至る想像力を忌避し、われわれが使う言葉の多義性を封印した時にほかならないと思われるのである。

* 本論は2013年度名古屋大学英文学会サマー・セミナー（2013年7月12日）における講演に基づくものである。

引用文献

Harada, Noriyuki. "Aspects morphologiques du livre et du langage: écrire, lire et compiler en Grande-Bretagne au xviii siècle et dans le Japon modern". *Les outlis de la pensée: Étude historique et comparative des 《textes》*. Paris: Fondation de la Maison des sciences de l'homme, 2010. 43-62.

———. "Regeneration from Vanity: Johnson's Satiric Mode in *The Vanity of Human Wishes*". 『英文学研究』 (*Studies in English Literature*) 第73号 (1997), pp. 89-102.

- Johnson, Samuel. "A Complete Vindication of the Licensers of the Stage." *Samuel Johnson: The Major Works*. Ed. Donald Greene. Oxford World's Classics. Oxford: Oxford UP, 2000, 71-83.
- 夏目漱石. 『文学評論』(下). 岩波文庫. 岩波書店, 1985.
- Real, Hermann J. *The Reception of Jonathan Swift in Europe*. London Continuum, 2005.
- Sprat, Thomas. *The History of the Royal Society of London*. London, 1667.
- Swift, Jonathan. *Gulliver's Travels*. Ed. Claude Rawson. Oxford World's Classics. Oxford: Oxford UP, 2005. (このテキストは、1735年刊行のフォークナー版に基づいている。)

Synopsis

Satire, Ambiguity, and *Gulliver's Travels*

Noriyuki Harada

Satire is a mode of expression in which the range of indication of words and sentences is most significantly extended. As it is used for criticizing the contemporary politics and topical issues in the society, it is often characterized simply as a linguistic genre of attacking. However, satire can be more suitably considered to be an expression where one of the most essential features of language is well reflected: intrinsic ambiguity of a word or sentence. It is by this intrinsic ambiguity that satire is distinguished from simple irony, paradox, straightforward exaggeration, or attacking criticism.

In *Gulliver's Travels* (1726), Jonathan Swift successfully describes the multiplicity of the world, making the most of this function of satire. In Lilliput, for example, he narrates the emperor's features with peculiar references to his "Austrian Lip," "arched Nose," and age of "twenty-eight Years and three Quarters old, of which he had reigned about seven." We can identify the indication of those references to some degree by the result of scholarly researches that have been done; "an Austrian Lip" suggests the thick underlip typical of the Habsburgs, "an arched Nose" invokes the memory of William III, and the age of the emperor alludes to George I. However, we should note that Swift does not here mention any one of those possible kings and emperors of the contemporary society, but makes several layers of characterization for the Lilliputian emperor. In other words, the Lilliputian emperor sometimes represents George I, but other times, he does not. By this satiric maneuver, the author shows the wide range of indication that each word or sentence can exhibit beyond our common understanding of one-to-one correspondence of a word and its meaning.

Swift's refusal of single interpretations of words also enables him to attack some fixed notions in our society. One of the well-known examples

of such attacks is observed in the scene where Gulliver was seriously shocked with the sight of the skin of a nurse in Brobdingnag. Gulliver cannot help saying with a sigh of disappointment: “This made me reflect upon the fair Skins of our *English* Ladies, who appear so beautiful to us, only because they are of our own Size.” This narration is quite different from common descriptions of beauty or plainness left by many authors; what Swift exhibits here is the possibility that the real beauties are deformed simply by changing our scale. Here the fixed and single notion of fair skins of English ladies totally breaks down.

As for the impropriety of our tendency to give a single interpretation of each word that is observed in Tomas Sprat’s record of the activity for improvement of the English language in the Royal Society, Gulliver’s narration of the failure of the attempt by linguistic scholars in the Academy in Lagado should be regarded as one of the most serious attacks. Although “many scholars adhere to the new scheme of expressing themselves by *Things*,” “if a Man’s Business be very great, and various Kinds, he must be obliged in Proportion to carry a greater Bundle of *Things* upon his Back.” However, in the country of the houghnhnms, Gulliver faces a totally different and difficult problem to be solved; the language that the horses are using lacks important vocabulary for human society like power, government, war, law, and punishment and nevertheless, he comes to admire the houghnhnms’ society because of the lack of such words and notions. On this phase, Swift, who successfully has described the multiplicity of the human thought and society by using effectively the satiric mode of language, is obliged to change the tone of Gulliver’s narration; his eloquence gradually becomes meaningless and Gulliver is finally banished from the country, in spite of his solicitation for remaining there.

In a sense, this pessimistic and misanthropic ending of *Gulliver’s Travels* is caused by Swift’s satiric use of language; he makes the most of the ambiguity of language, denies a single interpretation of words, and breaks down fixed notions that are usually understood from a single point of view.

Because of this satiric maneuver, Gulliver is obliged to encounter the defects of human society itself in the country where the common relationship between human beings and horses is reversed. And if we try to be perfectly free from the defects of human society, we need to get rid of some vile notions with the words and to accept the lack of enough vocabulary. The satire of *Gulliver's Travels* is sure to exhibit this depth of the human society but it must be noted that such a pessimistic feature of this work is not caused by the author's misanthropy, but by the widest possible range of human imagination and creation that this story has explored.